

Lib.

京都産業大学図書館報
Vol.50, 増刊号
(Jan. 14, 2025)

第19回京都産業大学
図書館書評大賞
入賞作品掲載号

図書館講演会	2-5		
石川直樹氏「旅と写真と言葉」		<佳作>	16-25
入賞者発表	6	アンケート	26
図書館書評大賞総評	7	統計	27
入賞作品および講評		応募があった図書一覧	28-30
<大賞>	8-9	選考委員よりひとこと	31
<優秀賞>	10-15	概要	32

2024年7月8日(月)、写真家の石川直樹氏をお迎えし、図書館講演会を開催しました。会場である本学図書館ナレッジ commonsに加え、Microsoft Teams でも生配信されました。

石川氏は人類学・民俗学の領域を専門に、辺境から都市まで、あらゆる場所を旅しながら、写真集やエッセイを中心に、作品を発表されています。世界各地を旅された際に、体験したこと、またそれらを写真や文章表現で、どのように伝えるのか、実際の写真や動画で示しながら、お話しいただきました。



◆初めての海外一人旅、写真家になるまで

幼い頃から、本がとても好きだった、と語る石川氏。海外に行ってみたい、と思ったきっかけも、読書体験からでした。かつてバックパッカーをしていたという高校の世界史の先生の体験談も聞き、17歳の夏休みに、一人でインドとネパールへ旅に出ます。インドでは、雑踏にもみくちゃにされ、日本と全く違う光景に驚き、大変だった、と振り返る石川氏。その後、陸路でネパールに入ります。

「ネパールのカトマンズに入ると、インドの雑踏とは全く違う、すごい涼しげな風が吹いていて、そして自然が多かった。当時はね。ネパールって良いとこだな、って思った。その時に初めて、ヒマラヤの山々とかを目にして、いつか登ってみたいけど、どうやって登ったらいいのかな、とかね」

その後20歳の時に、日本山岳会の気象観測機器設置登山隊に応募し、アラスカのデナリ山に登ります。この経験が、石川氏の旅の選択肢を広げていくことになります。

「旅をすることって、東西南北、水平方向、色んな場所に移動していくことが、基本だと思っていたんだけど、垂直方向に、空の高みへ向かって、旅をすることもできるんだな、っていうのを、この時初めて実感するわけです」

読書体験や写真集を通して、実際に色々な場所へ旅をしてきたので、自分自身も、人がどこかへ行く時に、後押しとなるような写真を残せたらと思い、石川氏は写真家になることを決意します。

◆大切にしていること

石川氏は、自身が大切にしていることについて、こう語ります。

「僕は自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の身体で感じて、世界を知覚していく。自分で世界を知っていく、理解していく。そういうのを、すごく大切なことだと思っていて。今だと、分からないことがあると、全部インターネットで調べて、出てきたことを読むと、なんとなく分かった気になっちゃうんだけど、自分の身体をそこに置いて、五感で感じていくことで、色々分かっていくことがすごく多い。そこから、色々な世界が、また広がっていくことが多くて、自分の身をもって、自分の身体しんたいを通じて、世界を感じていく。理解していく。知覚していく。そういうことを、今の今まで、ずっと大切にしてきたつもりです」

◆撮ることと、書くこと

石川氏は、写真を撮ることに加えて、言葉でも、自身の体験を記しています。ただ、写真と言葉は、基本的に分けていると言います。

「写真と文章っていうのは、すごく相性が悪くて、写真に文章をつけちゃうと、言葉に引きずられちゃうんですよ」

「写真っていうのは、1枚の写真で情報量がたくさんあるのに、一つの言葉で方向付けしちゃうと、その写真がそれにしか見えなくなっちゃう」

「写真は言葉になる以前の、身体の反応で撮るんです。だから説明的な写真を撮るんじゃなくて、自分の反応で撮る。うわっ、とか、すごい、とかって思ったときに、ただ撮る」

「言葉っていうものは、意味そのものだから(中略)、ディテールを詳細に書いて、伝えたいと思うことを書く」

石川氏は、このように写真と言葉を使い分けて、旅先で見たことや、聞いたことを、自分の中で咀嚼し、形にしていって、今日まで続けてきました。

◆ヒマラヤの山々への思い、そして現在

石川氏は17歳の時にネパールを訪れ、初めてヒマラヤの山々を目にし、23歳で、エベレストの登頂を達成します。世界には、エベレストと同じく8000m 越えの山が14個あり、それらはすべて(広義の)ヒマラヤ山脈にあります。石川氏はそれら8000m 峰を一つ一つ登頂し、残すはシシャパンマという山のみとなりました。

標高8000m 以上の世界は特別だと、石川氏は語ります。「自分の身体って、高所でこんな風に変化しちゃうのか」「自分って案外、こういうところで、他の人より頑張れるな」といった自分自身への発見や、「地球って、なんだろう」「山に登って、いったいなんなんだろう」といった様々なことを考えるきっかけをくれる、と言うのです。

23歳のエベレスト初登頂以来、25年近くヒマラヤと関わってきた石川氏。2024年9月に、シシャパンマに登り、ヒマラヤとの関わりに、一区切りをつけようとしています。

◆旅と写真と言葉

最後に自身の旅と、その体験を伝えることについて、こう締めくくりました。

「何かを伝えたい、っていうよりは、差し出す、っていうか提示する感じで。どうしてもこれを伝えたい、っていうことじゃなくて、差し出して、(読者が)何か感じるものがあったら嬉しいし、何も感じてもらえなくても別に大丈夫、っていうか、こういうことを自分は体験してきました、こういうことを考えたんだよ、っていうことをシェアする感じなんですよ」



質疑応答

Q. 旅の途中で読む本はどんなジャンルのものが多いですか？

「ジャンル問わずなんでも読みます。でも、山に行ったら、海の本を読んだりとか、山にいて、ヒマラヤの雄大な自然の中で、都市の混沌を描いた話とか、そういうのを読んだりすることが多いですね」

Q. モチベーションの作り方を教えてください

「モチベーションは作るものじゃなくて、色んな本とか読んだり、色んなアンテナを張っていきと、これ見てみたいとか、自分で行ってみたいとか、調べてみたいなってすごい思うんですよね。僕は、ありきたりな言葉で言えば、好奇心が旺盛なんだと思うんだけど、色んなことに興味を持つタイプなんです。だから、モチベーションの作り方、っていうより、いつもここに行ってみたいな、あそこに行ってみたいな、っていうのを考えてるんです」

Q. 本で読んだ場所に実際に行ってみて、意外だったことや、本を読むだけでは分からなかったこと、あるいはちょっとがっかりした体験などがあれば教えてください

(読書での体験と、実際の体験は別物、というのを踏まえた上で)

「僕は読書は読書で、一冊の良い本っていうのは、一つの良い旅をしたのと、同じことだと考えてるんです。だから若い頃に、たくさん本を読むっていうのは、誰もが勧めることだと思うんだけど、僕は本当に、実感をもって、勧めたいと思うんですよ。本の中で、たくさん旅をすべきだな、って。特に、子どもの頃から。大人になると、色んな知識が邪魔したりとか、スマホに関心をもって、読書の時間とか、僕もどんどん少なくなってるんだけど、でも10代20代の豊かな読書体験が、今の自分を作ってると思っています」

石川直樹氏の著作

講演会で話しされたエピソードをより深く体験することができる、エッセイや写真集をご紹介します。



『この地球（ほし）を受け継ぐ者へ：地球縦断プロジェクト「Pole to Pole」全記録』
石川直樹，筑摩書房，2015（290.9||ISI 2階・文庫）

石川氏は22歳から23歳にかけて、北極から南極まで、1年がかりで旅をする国際プロジェクトに参加しました。世界中から選ばれた合計8人の男女が、スキー、カヤック、自転車などの、人力の移動手段で旅をした模様を綴った、石川氏のデビュー作です。

石川氏は、英語でのプレゼンテーションですごく緊張したことや、世界から集まった7人の同世代の人たちとの共同生活の中で起こった、衝突や、恋愛。そうした思い出がとても印象に残っていると、当手を振り返っています。

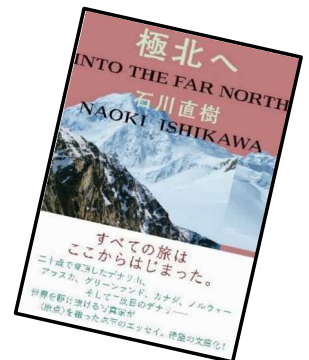
『極北へ』

石川直樹，毎日新聞出版，2021（297.8||ISI 2階・文庫）

初めてのデナリ登頂、そこからアラスカ、グリーンランド、カナダ、ノルウェーへの旅、そして再びデナリへ。極北の地で暮らす、日本人や、様々なルーツを持つ人々との交流。雪の降りしきる中、車で5時間かけて氷の上を走る恐ろしさ。デナリの頂上直前で、吹雪に見舞われる過酷さ。温暖化による土地の減少や、環境の変化。それらの体験を通して綴られたエッセイ集です。

極北の土地でも、地域によって様々な暮らし方、自然の表情、直面している問題があり、それらを石川氏の言葉を通して、追体験することができます。

巻頭には、今回の講演会で紹介された写真も、一部掲載されています。



『奥能登半島』

石川直樹，青土社，2021（748||ISI 2階）

能登半島の最北端に位置する、石川県・珠洲市を舞台とした写真集です。

石川氏は、日本の島々を巡る旅も、ライフワークとしていました。現在は日本の半島を中心に撮影を続けており、こちらの写真集も、その一つです。伝統行事である、能登のキリコ祭り、ユネスコの世界無形遺産に登録されている、農耕儀礼、奥能登の“あえのこと”、奥能登地域で暮らす人々の、生活風景、産業、その一時を、写真から見て取ることができます。

島国である日本は、東西南北様々なところから、色々なモノ・人が入り、交流し、影響を受けてきました。島や半島から見ていくことで、その様子がより具体的に分かっていくと石川氏は語ります。



『地上に星座をつくる』石川直樹，新潮社，2023（290.9||ISI 2階・文庫）

『シェルパの友だちに会いに行く：エベレスト街道日誌2021』石川直樹，青土社，2021（292.58||ISI 2階）

『最後の冒険家』石川直樹，集英社，2008（289.1||KAN 地下1階） などほかにも、所蔵しています。

また、石川氏のHPで、講演会で紹介された登山動画などを見ることができます。

⇒ <http://straighttree.com/index.html>



読書体験が、旅のきっかけとなっている、と語る石川氏。
講演会で紹介された、作家・冒険家・写真家の本を紹介します。

沢木耕太郎「深夜特急」シリーズ

『深夜特急』 沢木耕太郎, 新潮社, 2020 (915.6||SAW||1 2階・文庫) ほかに
インドのデリーから、イギリスのロンドンまで、乗り合いバスで行きたいーそう思
い立った“私”の、旅の道中に起こる出来事を描いた紀行小説です。自身の興味の
赴くまま、アジアから中東、そしてヨーロッパへと、“私”は様々な人と出会い、時に
停滞しながらも、旅をしていきます。

高校生の頃、冒険や探検の本や、ノンフィクションを読み、アジアへ行ってみたく
なった石川氏。このシリーズは、そのきっかけとなった本のうちの一冊です。

現在もバックパッカーのバイブルとして、多くの人々を旅へと駆り立てていま
す。



植村直己『青春を山に賭けて』

文芸春秋, 1977 (290.9||UEM 3階・学部の学び/経営)

石川氏が、デナリに登るきっかけとなった本です。冒険家の植村直己氏の、10代、20代
の頃の経験が綴られており、5大陸(当時)の最も高い山をそれぞれ登りながら、旅をして
いく青春記です。

植村氏は、真冬のデナリに単独で初登頂後、行方不明となっています。「植村さんが眠る
デナリに、自分も登れないだろうが」、石川氏はそう思い、日本山岳会の気象観測機器設置
登山隊に応募しました。

『北極圏一万二〇〇〇キロ』 植村直己, 山と溪谷社, 2014 (297.8||UEM 2階・文庫)
などほかにも、所蔵しています。



星野道夫『旅をする木』

文芸春秋, 1999 (915.6||HOS 2階・文庫)

アラスカの大地を撮り、言葉で綴った写真家・星野道夫氏のエッセイです。

古書店で出会った、アラスカの写真集に魅せられた、若き日の星野氏。住所も分からない、
アラスカの村の村長宛に手紙を書きます。唯一返事をくれたシシュマレフ村の村長を訪ね、
そこから星野氏は生涯、アラスカの自然、そこに住む人々との交流を続けました。

石川氏は20代の頃、星野氏の本を読み、自身もシシュマレフに行ってみたいと思い、実際
にシシュマレフを訪れます。シシュマレフは温暖化の影響で、現在は土地がほとんどなくな
り、村自体が移住する事態となっています。



『長い旅の途上』 星野道夫, 文芸春秋, 2002 (915.6||HOS 2階・文庫)

などほかにも、所蔵しています。

入賞者発表

第19回京都産業大学図書館書評大賞には95作品の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次のとおり入賞者を決定しましたので発表します(賞ごとの氏名50音順)。

大賞



氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名等)
うらたに まさや 浦谷 征哉	経済学部 経済学科 3年次生	昆虫と細菌の相利共生 『カメムシの母が子に伝える共生細菌』(細川貴弘 著)

優秀賞



氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名等)
かねだ たくみ 金田 拓巳	法学部 法律学科 3年次生	虚ろな十字架 『虚ろな十字架』(東野圭吾 著)
たなか たつろう 田中 達郎	文化学部 国際文化学科 3年次生	AIを通して見えてくる人生の生き甲斐 『タイタン』(野崎まど 著)
はせバ こうすけ 長谷部 光祐	法学部 法律学科 3年次生	タイパを意識する私たち 『デンマーク人はなぜ4時に帰っても成果を出せるのか』(針貝有佳 著)

佳作



氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名等)
おかだ ようた 岡田 陽太	文化学部 国際文化学科 3年次生	裏方の意義 『ミッキーマウスの憂鬱』(松岡圭祐 著)
かたやま 片山 なつみ	文化学部 国際文化学科 4年次生	子供の世界 『晩年の子供』(山田詠美 著)
たかはし あんな 高橋 杏花	文化学部 国際文化学科 3年次生	後悔の人生 『ツナグ』(辻村深月 著)
まきお はな 榎尾 巴那	文化学部 国際文化学科 1年次生	普通のかたち 『わたしの美しい庭』(風良ゆう 著)
やまざき ようすけ 山崎 遥介	現代社会学部 現代社会学科 3年次生	日本の労働システム「メンバーシップ型」の問題点 『ジョブ型雇用社会とは何か：正社員体制の矛盾と転機』(濱口桂一郎 著)

図書館書評大賞総評

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 大平 睦美

今年の書評大賞には、95作品もの応募がありました。応募者の皆様の熱意と努力に心から敬意を表します。選考委員会による厳正な審査の結果、入賞者が決定しました。

はじめに今年の応募作品については、非常に多様なテーマを扱っており、各分野における深い洞察が光りました。科学、文学、社会問題、AI といった幅広いテーマが取り上げられ、それぞれの視点からの独自の考察が見られました。特に、科学的な内容をわかりやすく解説した作品や、法律と倫理の交差点を探究した作品など、専門的な知識を持ちながらも一般読者に伝わりやすい表現がなされていた点が印象的でした。

また、入選者の皆様が選んだ書籍自体も多岐にわたっており、現代社会の様々な側面を反映していました。例えば、労働システムの問題点を鋭く指摘した作品や、日常の中にある美しさと平凡さの価値を再認識させる作品など、読者に新たな視点を提供するものが多く見受けられました。

さらに、未来社会における AI の役割や人間の生き甲斐について考察したものもあり、現代の技術進歩と人間社会の関係性について深く考えさせられる内容でした。これらの作品は、単なる書評にとどまらず、読者に対して思考を促す力を持っていると感じました。

全体として、今年の書評大賞は、応募者の皆様の知的探求心と創造力が存分に発揮されたものであり、高いレベルの作品が集まりました。選考委員会としても、審査にあたり非常に難しい判断を迫られる場面が多々ありましたが、それだけ質の高い作品が多かったことの証でもあります。

しかし、佳作に選ばれなかった作品には、いくつかの共通する課題が見受けられました。まず、テーマの選定や書評の構成において、もう一步踏み込んだ深い考察があればさらに良い書評になったと思います。特に、選んだ書籍の内容を単に要約するだけでなく、自身の視点や独自の解釈を加えることが求められます。また、文章の表現力や論理の一貫性においても、さらに改善する余地があると感じました。読者に対して明確で説得力のあるメッセージを伝えるためには、より緻密な構成と表現が必要とします。今年度の作品を糧に来年度の応募をお待ちしています。

最後に、応募者の皆様の今後のさらなる活躍を期待するとともに、図書館はこれからも皆様の知的探求を支援し続けます。改めて、入賞者の皆様、おめでとうございます。そして、応募者の皆様全員とご指導いただきました先生方に感謝の意を表します。

第19回 京都産業大学図書館書評大賞



大 賞

経済学部 3年次生

うらたに まさや
浦谷 征哉



書 名：『カメムシの母が子に伝える

共生細菌』

著 者：細川貴弘著；辻和希コーディネーター

出版社，出版年：共立出版，2017

「昆虫と細菌の相利共生」

建物の壁や洗濯物にくっついていたりする身近な存在「カメムシ」。今年はメディアで取り上げられるほど大量発生しており、より見かけることが多くなった。カメムシが好きだという人は少ないと思う。あの強烈な臭いとフォルム、むしろ嫌いな人が多いだろう。しかし、本書を読み、あの小さな体に秘められた神秘や生態の仕組みを知ること、ただ「臭くて気持ち悪い」と感じていた彼らに対する見方が変わるだろう。

本書は細川貴弘氏による科学書で、カメムシとその共生細菌の関係について研究成果を元に詳細に記されたものだ。冒頭では昆虫の多様性について触れられ、その繁栄について説明されている。昆虫は多様な餌資源に適応し、競争相手が少ない餌を主食とすることで生存確率を高め、数を増やすことができた。しかし、栄養成分に注目すると大きな謎が浮かび上がってくる。栄養素が豊富な餌資源を利用する昆虫がいる一方で、著しく栄養素が偏った餌資源を利用している昆虫もいる。彼らがなぜ栄養不足に苦しむ様子もなく活動、繁殖を前者と変わらず行っているのか。草の汁のみを食べる虫もいるが、これでは必須アミノ酸が摂取できず活動できない。この疑問が出るのは当然である。この謎に共生細菌が大きく関わっている。栄養素が偏った餌資源を利用している昆虫は、体内に共生細菌を保持しており、不足している栄養分を共生細菌に合成してもらうことで栄養不足を解消しているのだ。共生細菌も多種多様であり、宿主となる昆虫に合わせた種類がある。また、共生細菌は昆虫の体内に棲まわせてもらうことで捕食者や環境ストレスから身を守ることができ、昆虫と相利共生となっているのだ。

なぜ、細川氏はカメムシを選んだのか。それはタイトルにもある「母が子に伝える」という点において他の昆虫とは違った特徴があるからだ。共生細菌と宿主昆虫は

別個の生き物である。したがって、宿主昆虫は最初から共生細菌を保持していない。しかし、産卵された直後の卵の内部を調べると共生細菌がいる。これは卵として体外に産み出されるよりも前、体内で母から子へ共生細菌の受け渡しが行われているということになる。カメムシはこの過程が少し違う。カメムシは卵に共生細菌が入っているカプセルやゼリー状のものを取り付け、孵化した幼虫がそれを体内に取り込み伝播が行われる。他の昆虫と異なり伝播が体外で行われるため観察が可能なのだ。つまり、伝播の過程に人の手を加えることができ、共生細菌と宿主昆虫との関係をさらに深く調べることができる。様々な実験内容やその結果は実際に読んでその生態と共生関係の驚くべき複雑さを知ってもらいたい。

本書は単なる昆虫の生態解説書ではなく、生命の連鎖や共生の重要性を深く考えさせられる一冊だ。この本を通じて、読者はカメムシという小さな生物に秘められた大きな物語を知り、自然の偉大さとその複雑さに改めて感銘を受けることになるだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 大平 睦美

カメムシの大量発生は社会的問題となる中、筆者がこの本を選んだのはなぜだろうかと考えた。書評に書かれているように「カメムシ」が他の昆虫とは異なる方法で子孫に共生細菌を伝える過程を知ると、「カメムシ」という小さな虫のダイナミックな生命の伝達に驚くだろう。「カメムシ」や「細菌」というキーワードは負のイメージがつきまとうが、それは人間から見た「カメムシ」や「細菌」であり、カメムシや細菌たちは私たちと同様に地球上のいち生物に過ぎない。そんな風に考えると部屋に入って来るカメムシを忌み嫌い、その後のことをも考えず踏みつぶすなどできようもない。

筆者はまた、この本の著者についても言及している。私たちは出来上がった「本」を読むことが主であるが、著者がこの本を書くために、先輩の研究者の助言を得ながら、気の遠くなるほどの数のカメムシを採集、実験しているのである。この本を読むとカメムシの生態を詳しく知ることができる。また、それだけにとどまらず自然科学、生命科学がわかるようになる。それは筆者である細川氏の日々の研究の努力に他ならない。この本を読んで、著者から伝わる研究への情熱や、対象物への暖かなまなざしを感じる書評であった。

入賞者から一言



この度は大賞に選出していただき、大変光榮に存じます。本を読むことはあっても書評を書くといったことは初めてでしたが、本の魅力を自分なりに考え表現し、それが評価されたことを非常に嬉しく思います。今回、一冊の本と向き合うことで本の素晴らしさを改めて認識することができました。今後も読書を楽しんでいこうと思います。

第19回 京都産業大学図書館書評大賞



優秀賞

法学部 3年次生

かねだ たくみ
金田 拓巳



書名：『虚ろな十字架』

著者：東野圭吾

出版社，出版年：光文社，2017

「虚ろな十字架」

近年、凶悪な殺人事件や傷害事件が起きる度に、犯人の死刑を望む声が SNS 上などで散見される。それは多くの国民が死刑こそ最も効果的な犯罪者への刑罰、そして被害者やその遺族への救済だと信じているからであろう。本作品の主人公である中原道正も、身勝手な理由で愛する娘を殺された際には犯人の死刑を強く望んだ。しかし、何とか死刑判決を掴み取った後、道正と妻の小夜子に残ったのは日に日に増していく喪失感だけだった。犯人が死刑になったところでもう娘は帰ってこない。そんな残酷すぎる事実だけが2人を支配し、夫婦は離婚するに至った。それから時間が経ったある日、道正のもとに今度は元妻である小夜子が何者かによって殺されたという連絡が来る。娘を殺され絶望のどん底に落とされた道正が何とか立ち上がった矢先に、今度は元妻も殺された。この予想外の展開に読者は深い同情を強いられ、道正と共に事件の真相へと迫っていくことになる。

本書はミステリー小説でありながらもその本質は謎解きではなく、一つの殺人事件を多くの異なる立場の人間の視点から描くことによって日本の司法制度が孕む脆弱性を露呈させ、安逸を貪り凶悪犯罪とは無縁な人生をこれまでもこれからも享受していくと信じて疑わない我々読者に、「罪を償う」とは一体何なのかという日頃考えることのない問いを投げかけるところにある。作者である東野圭吾氏はこの難題をミステリーと見事に融合させており、事件の真相に迫れば迫るほど読者はこの問いに真正面からぶつかることとなる。

本作品の終盤で、ある人物が道正に魂の叫びを発する。「刑務所に入れられながらも反省しない人間と、罪を隠しつつも胸に自戒の念を抱き続け、贖罪として多くの命を救う人間と、どちらが真の償いなのでしょうかと。この叫びこそが東野圭吾氏が我々読者、ひいてはこの社会全体に問いかけたい主張であると感じる。現行法に則れば前者が正しいことは自明だが、法が定める最大の罪を償う行為である死

刑が犯人に下されたとしても被害者の失った命や遺族の傷ついた心が元通りになる作用は微塵もなく、さらに犯人が反省しないまま死ぬことになれば死刑というものが持つ意味は無に等しい。一方で犯人が生きていることは被害者や遺族の心を蝕み続けるうえ、犯罪者を何十年刑務所に入れておいたら真人間に更生するという確証もない。これらを鑑みると、読者は現行の刑罰システムが被害者側の心情を尽く無視した呆れるほど形骸的なものであることに気付かされると同時に、そんな虚ろな十字架がまかり通っている現状に強い危機感を抱くことになる。

本書を手に取り、数々のミステリーを生み出してきた東野圭吾氏にしか書けない予測不可能な展開、そして立ちはだかる圧倒的な問いについて自分なりの答えを見つけ出して欲しい。この本を読んだ全ての読者が己の信念を持つことで、本書の存在意義は果たされる。

選考委員による講評

選考委員代表 共通教育推進機構教員 松尾 智晶

この本のタイトルは、ある事由を別の表現であらわしたものである。その事由の存在に意味があるのか、あるとすればどのような意味か、その事由はかかわった人たちを満足させるのか、次の幸せに向かわせる機能があるのか。ストーリーは、これらの問いに YES と答える人物と NO と答える人物が複雑にからみあう展開を見せる。ある事由とは「贖罪」であり、「殺人」という罪に向き合う人々の多様な思いが語られ、読者はスリリングな物語に翻弄される。タイトルの「十字架」とは、イエス・キリストが人類の原罪を贖うため磔にされたそれを示すのであろう。書評が指摘する「罪を贖うとは一体何なのか」という問いを投げかけるこの本は、明確な答えを示さずに終わる。自らが殺人を認めることで、死刑になることで、刑に服することで、罪は贖えたといえるのか。本書の読後感は複雑なものである。そこに、書評は鋭く的確なメッセージを残す。『立ちはだかる圧倒的な問いについて自分なりの答えを見つけ出してほしい。この本を読んだ全ての読者が己の信念を持つことで、本書の存在意義は果たされる。』

入賞者から一言



この度は優秀賞に選出して頂き、誠にありがとうございます。自分の書評が認められ、昨年よりも上の賞を頂けたことが何よりも嬉しいです。本書評が「虚ろな十字架」の魅力を伝え、読者が何かを考えるきっかけになれば幸いです。

第19回 京都産業大学図書館書評大賞



優秀賞

文化学部 3年次生

た な か たつろう
田中 達郎



書名：『タイタン』

著者：野崎まど

出版社，出版年：講談社，2023

「AIを通して見えてくる人生の生き甲斐」

野崎まどの小説『タイタン』は、仕事が引き起こす鬱を通じて生き甲斐とは何かを見つける物語である。この物語の舞台となる世界は人間にとっての理想の世界、いわゆる「ユートピア」というものだ。背景には人類のあらゆる仕事を代替し、管理するAI「タイタン」の存在がある。緩くではあるがAIが人類を管理しているという世界観は、一見小説の題材としてよくある「近未来ディストピア物」のように見える。しかしこの小説の焦点はそれとは別の場所にあるようだ。結論から言えばそれは生き甲斐である。この物語に登場する人たちは皆、何もしなくていい社会、つまり生き甲斐の感じにくい世界でそれは何かと考えている。そうした登場人物たちの姿から期せずして読者は仕事、ひいては人生の生き甲斐について改めて学び直す機会を得ることができる。

2205年、人類はAI、タイタンの開発により完全な楽園を作り出す事に成功していた。タイタンはあらゆる仕事を代替し、人類は趣味だけに自分の時間を使うようになった。そんな中、心理学を趣味とする女性「内匠成果」のもとに、タイタンを制御する「仕事」に就いている男、ナレインが訪れる。そして彼女に機能不全に陥ってしまったAI、タイタンのカウンセリングという仕事を依頼した。世界に12基存在するタイタンの一つ「コイオス」は、彼女と対話を進めるうち自分が鬱病のような症状を示している事を知る。次第に鬱とは何かを理解し、自分は仕事をする事が嫌いだという自覚を持ったコイオスは内匠成果と共に仕事について理解を深めるための休暇を取ることになる。

この小説の魅力はコイオスの成長にある。ここで言う成長とは、AIが映画「ターミネーター」のような知能を増して次第に人類に反乱を起こすといったものではなく、純粹に人間的な心の成長である。その成長の中でコイオスは仕事に対して漠然と嫌いだと思っていた理由を言語化し折り合いをつけていく。仕事とは個々人で価値観

が大きく異なるものである。人によってはただお金を稼ぐだけの無味乾燥なものかもしれないし、生き甲斐そのものであるという場合もある。仕事をする事が当たり前の現代人だからこそ、その本質的な意味を理解しているとは言いがたい。ならば初めから知識も何もない AI ならばどう捉えるだろうか。この小説に登場する AI は普段は自分のしている仕事について思いを巡らせない。現代人と異なり仕事も甲斐もわからないのではなく知らないのだ。そうして知らない事を知らないなりに模索していく様は人間の子供のようで見ていて可愛い。そして最終的にコイオスは自身の身の丈に合った仕事を見つけ、鬱と生き甲斐に折り合いをつける。

この小説は総じて現代の生き方に悩む多くの人に読んでもらいたい。お金を稼ぐ仕事でなくとも学校の課題、家事、その他のやるべきこと、全ての仕事へ生き甲斐を見いだすための指標をコイオスとともに学ぶことができるだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 生命科学部教員 川上 雅弘

これからどのような仕事に就こうか？現在の日本の大学生の多くは、学生生活の半分を過ぎる頃に就職活動を意識せざるをえない状況に置かれる。そういった中で評者も、どのような進路に進みどのような仕事に就くか、仕事の意味や人生の生き甲斐について考え思い悩んだ末に、いまは自分なりの回答や指針を見つけていそうだ。この書評からは、このようなことも感じる。仕事の意味や人生の生き甲斐について考えるのは、大学生に限らないが、評者はこの小説がそういった悩みを抱えた人への処方箋になりうると評す。小説のストーリーや魅力を端的に表現しながら、同世代へのメッセージがこもった書評であった。もちろん人生の生き甲斐などに悩んでいない人にとっても、本書は人生をより豊かにする指標を提供するだろう。この物語が多くの人々の心に触れることを願う。

入賞者から一言



この度は優秀賞に選出していただき、誠にありがとうございます。2回生の時にも応募させていただきましたが、今回ついに入賞することができ大変嬉しく思っています。私の書評が『タイタン』の魅力をより多くの方々に伝える一助となれば幸いです。

第19回 京都産業大学図書館書評大賞



優秀賞

法学部 3年次生

は せ べ こうすけ
長谷部 光祐



書 名：『デンマーク人はなぜ4時に
帰っても成果を出せるのか』

著 者：針貝有佳

出版社，出版年：PHP 研究所，2023

「 タイパを意識する私たち 」

昨今、私たちZ世代の間で「タイパ」というものが流行している。正式名称はタイムパフォーマンス。娯楽、教養、あらゆるものを短い時間で多く得たいという考え方だ。動画を倍速で視聴したり、ネタバレ消費を積極的にしたりすることが例として挙げられる。考え方によってはネットショッピングもタイパを意識したものと言えるかもしれない。「スキルを得たい」、「やりたいことに時間を割きたい」など一つの目標に向かって回り道をせず、最短距離で取り組むことは非常に効率的であり、忙しい現代社会で限られた時間を有効活用する重要なスキルだ。

しかし、タイパは短時間で集中してタスクをこなすことであり、手を抜くことやズルをすることではない。前者が努力に裏付けされた前向きなタイパだとするならば、後者は質を犠牲にした成果の出にくい後ろ向きのタイパとも言える。本書はその前向きなタイパを目指すための教科書とも言えるだろう。

午後 3 時から帰宅の準備を始め、午後4時には仕事を終え、オフィスから人がいなくなる。それにもかかわらず、「2023年の国際競争力1位、デジタル競争力1位、今後5年間のビジネス環境3位」と世界から注目されるハイスペックな国デンマーク。その高い生産性と幸福度のからくりを「時間」「仕事」「人間関係」の3つの観点から紐解いていく本である。さらに、本書の最後には、デンマーク在住の著者自ら「人体実験」と称し、デンマーク人のライフスタイルへの改革を試みた結果も紹介されているため、説得力も十二分だろう。

本書では、どの観点から切り込む際にも、常に「自分にとって一番大切なもの」を軸としている。すべての物事に優先順位をつけ、重要度の高いものにはこだわり、低いものにはこだわらずバツサリ切るという考え方だ。飲み会のような仕事の付き合いはしない、同じオフィスにいても会議はオンライン、ランチ休憩は最長でも30

分など、常に効率を重視している。この一見ドライとも捉えられかねないデンマーク人のライフスタイルが、なぜ前向きなタイプに繋がるのか、そしてこれほどまでに効率を突き詰めて本当に幸せになれるのか。その疑問にはこの質問を返したい。皆さんは自分が最も幸せを感じる瞬間は何をしているときだろうか。これにすべての答えが詰まっている。夢中で何かをしているときだけ時間が過ぎるのが早く感じ、もっとやりたいのにとってしまう。あなたが最も幸福を感じる瞬間はそこにあるのだ。その幸福を最大化するための優先順位なのだ。

「限りある時間の使い方を考えることは、真に豊かな時間を創ることを意味する」と述べられている通り、タイプは自らの幸福のためにある。そのタイプを一つ一つ丁寧に解剖していく本書は今を生きる忙しい現代人の助けになるに違いない。今私はこの書評の最終チェックをしている最中だが、午後4時を過ぎたのでここで失礼する。それでは皆さん良いタイプライフを！

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 武田 史郎

人々の生き方や働き方は、各国の文化や社会制度によって大きく異なります。日本は一定の豊かさを享受している国ではあるものの、仕事中心の生活スタイルや長時間労働が一般的であり、これらは解決すべき課題として広く認識されています。

本書評の対象である書籍は、多くの人々が残業をせず、十分な休日確保しながらも、世界的に高い生産性を実現しているデンマークの生活や働き方を紹介するものです。この書評の特筆すべき点は、書籍が紹介する実践的なノウハウにとどまらず、その背後にある一貫した指針を的確に捉えていることです。具体的には、デンマークの人々が労働時間を短縮するために行っている多様な取り組みを紹介する中で、書評は「自分にとって最も重要なものを見極め、物事に優先順位をつける」という価値観に焦点を当てています。

労働時間の短縮は社会制度や企業文化にも強く依存する側面があるため、個人の働き方や生活を変えるだけでどこまで実現可能かという疑問はわかりますが、この書籍を契機に、海外の状況を含め広い視野で物事を考えるきっかけとなることを期待したいです。

入賞者から一言



この度は優秀賞をいただき、誠にありがとうございます。普段何気なく意識していることを噛み砕き、咀嚼していく過程は、自分の考え方を見つめ直す機会にもなりました。応募のきっかけをくださった木俣教授に心より感謝いたします。今後も学びを深めていきたいと思いをします。

第19回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 3年次生

おかだ ようた
岡田 陽太



書名：『ミッキーマウスの憂鬱』

著者：松岡圭祐

出版社，出版年：新潮社，2008

「裏方の意義」

夢の国ディズニーランド、そこは多くの人から見て素晴らしい夢の世界であり、徹底してゲストを楽しませるといふ仕事によって作り出されている。実際日本一のテーマパークだろう。そんな夢の国を作る裏舞台はいったいどうなっているのか。全キャストがゲストを楽しませたいと思い、熱心に働いているのか。松岡圭祐の『ミッキーマウスの憂鬱』は裏舞台のキャストにスポットを当てたフィクション小説である。

主人公はディズニーランドの準社員に採用されたばかりの21歳の若者、後藤大輔だ。彼は夢の国で働けると心を踊らせて初日の仕事に向かう。しかし行ってみると想像していた職場とはかけ離れていた。後藤以外の人間は冷めきった気持ちで働いていたのだ。正社員のやり方に良かれと思って意見を出しても『意見なんかだすなよ』『現実ってものを見る』などと言われ、アルバイト初日の人間の意見など見向きもされなかった。後藤が夢の国の準社員になって早速、後悔していたところディズニーランドを揺るがす大事件が発生する。それはミッキーマウスの着ぐるみの紛失である。そもそもミッキーマウスを単なる着ぐるみだと客に思わせることはもちろん、自身が思うことすらディズニーランドでは禁制となっており、その紛失がアメリカの本社にばれようものなら、すぐに日本での営業が停止されてしまう。上層部は何か問題があれば後藤のような準社員に責任を転嫁する。準社員を「盤上の駒」としてしか見ていないのだ。今回も紛失した当日ミッキーマウスを運送係へ届けた担当の準社員に全ての責任をなすりつけようとした。しかし、実際は運送係のミスであり、それをいち早く突き止めた後藤は、味方についてくれた数少ない周りの人たちと協力し疑いをかけられた準社員の身の潔白を証明しようと奮闘する物語である。

本作はフィクション作品だが、巨大企業の上層部がその権力を駆使して弱者に圧力をかけるということが、実際に行われていてもおかしくないと思わせる現実味の

ある内容になっている。大多数が圧力に屈し、それに従う中での後藤の権力に抗う行動が読者に緊張をもたらし、少数派である協力者の中の一人が上層部側の人間であることが大きな安心感を与える。この作品はフィクションとして描かれているが現実社会でも権力に抗うことがどれほどリスクの大きいことであるかを示すとともに、多くの人が無難な方を選ぶ中で、リスクを承知の上で正義を選ぶことが出来るのかということを読者に迫る作品になっている。

選考委員による講評

選考委員代表 共通教育推進機構教員 松尾 智晶

フィクションの娯楽小説、舞台はディズニーランド。舞台となる現場を綿密に調査し現実味ある架空のストーリーを編み出す名手である著者は、書評が冒頭に示すように裏舞台のキャストにスポットを当てて物語を展開する。裏舞台であるから、そこにパレードや有名なキャラクターがもつ華やかさはない。主人公は「準社員」であり、「社員」との格差、とりあつかわれ方の違いが生々しく描写され、読んでいて胸が痛むほどである。しかしながら「盤上の駒」と軽んじられていた準社員たちが追い詰められた状況で勇気ある決断をし、園をゆるがず大事件を解決する本作は読者をカタルシスへいざなう。そこで、書評は鋭くこの作品の要諦を穿つのである。『現実社会でも権力に抗うことがどれほどリスクの大きいことであるかを示すとともに、多くの人が無難な方を選ぶ中で、リスクを承知の上で正義を選ぶことが出来るのかということを読者に迫る作品になっている』。物語を自分ごととしてとらえ、読者にとって自分がいかに生きることが良いのかを考える契機となり得る作品であると指摘した点を、高く評価したい。

入賞者から一言



今回、初めて佳作に入賞し、主にゼミ活動で培ってきた文章力が自身でも気付かぬうちに上がっていたことが分かり、嬉しさとともに、自信に繋がりました。

今後も、感じたことを正確に言語化することを大切にし、来年度の書評大賞でも入賞できるよう取り組んでいきたいです。

第19回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 4年次生

かたやま

片山 なつみ



書名：『晩年の子供』

著者：山田詠美

出版社，出版年：講談社，1994

「子供の世界」

「他人から見たら取るに足らないような、しかし個人にとっては妙に決定的と思われるような、心の中の大事件」と評される山田詠美『晩年の子供』。幼少期の繊細な感情。大人になるにつれ失われていく子供の世界がそこには描かれている。私達は幼い頃、曖昧と無知、脆く繊細な感性の中で、何を思っていただろうか。そんな郷愁を抱かされる一編である。十歳の夏休み、少女は飼い犬に噛まれ狂犬病に罹ったと思い込む。少女は、自分がもうすぐ死んでしまうと信じたことで「晩年」を迎えた。死を悟った半年間、拙く純粋な心で世界はどう見えたのか。自身の死を受け入れるためにどう生きるか、そんな少女の前に、自然、人、感情の彩が鮮明に浮かび上がる。

少女は「晩年」を悟ってから、あらゆるものに思いを馳せ、純粋で豊かな感性を研ぎ澄ますようになった。例えば、季節の移り変わり、家族の愛など、目に見えないものを感じ取り、幸福について考えた。ある時は、自身を顧み、過去の行いへの罪悪感から、クラスで孤立させた子に話しかけ、私を嫌わないでと頼んだ。頬を撫でる風や理科室の石を愛し、また、死への恐怖から不安と恐怖から図書室の本を盗んでしまった。少女はあらゆることに自身を賭け、日々に心を使った。最後には夜中の墓地に赴き、死者に敬意を表した。今生きていることだけを考え、孤独感もない風いだ気持ちで「晩年」を思う。最後に、少女は迫り来る死に向き合い、とうとう母に狂犬病を告げる。ところが、母は、予防接種している飼い犬だから死ぬわけがない、と言いあっさり少女の「晩年」を終わらせてしまう。以前「晩年」の中で、「私が死んだらどうする？」と聞いた少女に、母は「そんなことを言うと現実になってしまうから、冗談でも聞かないで」と返していた。少女は、母は自分の死について何もわかっていないと思っていた。しかし現実、テレビアニメの内容を真に受け、自分は死ぬと誤解をしてしまっていたのは少女の方だった。

少女の「晩年」は子供の中の世界だから起こったことなのだ。しかし、たとえそれが、大人たちが一蹴してしまうような些細なことでも、子供は其中で喜んだり、悟ったり、絶望したりする。そうして、成長した少女が本編を回想しているように、大人になっても忘れられないものなのだ。

著者は幼少期、父の転勤でいくつかの地方都市に移り住んだ。そしてその自然に溢れた、無自覚な季節との戯れの記憶が作家としての下地に役立ったという。本短編集は表題作『晩年の子供』の他にも、著者の瑞々しい感性で描かれた子供の世界の物語が収録されている。本編の少女には名前が付けられていない。これはこの少女だけでなく、誰にでも当てはまる子供の世界だからだ。何も知らず、想像力で自分と世界をつないでいた幼少期。私もこんなことを思っていたのではないかと考えさせられる一編である。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 大平 睦美

はじめてタイトルを聞いた時『晩年の子供』の「晩年」と「子供」のつながりがわからなかった。しかし、よく考えれば35歳で亡くなったモーツアルトの晩年は30代前半、子供が明日この世から消えると思うと、10歳でも晩年であることに気がついた。それでこの本の内容は、発達段階において思春期に近づいた子供が漠然と持つ「死への興味」かというところでもない。偶然のことから、死を意識した子供が生あるうちにしなければならいことを考えて実行していくお話は、最後を読むまで健気で優しい話である。読者は死に取りつかれたことがあるだろうか？私はこれまでに何度か死を覚悟すべき時かと、考えたことがある。私の場合は、大事無く回復したが、些細なことにも死を連想することは多くの人たちが共通することではないだろうか。この物語は単なる10歳の子供の夏の出来事ではなく、死を自覚した人の生き方の話だと感じた。書評ではあらずに充てる時数を工夫すればよりよい書評になったと感じた。

入賞者から一言



この度は佳作に選出していただき、誠にありがとうございます。限られた文字数で工夫を凝らして仕上げたので、今回入賞することができ大変光栄に思っております。本書評を通して、皆様の読書体験を少しでも豊かにできていたら幸いです。教科書に載っているお話も収録されており、読み易く、どこか懐かしい短編集です。是非これを機に手に取ってみてください。

第19回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 3年次生

たかはし あんな
高橋 杏花



書名：『ツナグ』

著者：辻村深月

出版社，出版年：新潮社，2012

「後悔の人生」

現代人は休暇でも仕事を行い忙しい日々を送っている。そういった日常の中で大切な人を疎かにしていないだろうか。大切な人であってもその死は時として容赦なく訪れる。突如として残された生者は、漠然とその人に抱いていた感情を初めて明確に感じることになる。それは感謝などの明るい感情もあれば、後悔などの暗い感情もある。辻村深月の『ツナグ』は死に向き合う人間の本質をリアルに描いている。

主人公の男子高校生歩美は一生に一度だけ死者と会わせる役割、「使者(ツナグ)」の研修中である。歩美のもとには突然死んだアイドルに感謝を伝えたい OL をはじめとする、様々な事情を持った依頼人たちがやってくる。死者は生者からの呼びかけでしか会えない。死者はその呼びかけを断ることができるが、その後会いたいと言う生者がいない限り死者は誰とも会えない。生者が死者に会えるのは一人だけで、死者もまた生者に一人しか会えない。そんな一度きりの機会を使ってまで、再会した依頼人と死者。本作は歩美が使者としての自身の役割、死者と生者の関係に対し、悩み、考え、成長する話だ。

物語には年代、性別の違う四人の依頼人が登場する。初めの四話はそれぞれ依頼人たちの視点で、最終話は歩美の視点から描かれる。依頼人と死者の繋がり、それを見た歩美が感じたことを読者が疑似的に体験する語りとなっているのだ。初めは死者と会わせてくれるという胡散臭い役割をする高校生ぐらいの男の子、つまり歩美だが、一体何者なのかという疑問が読者を物語に引き込む。こうして少しずつ歩美の正体が話の進行と共に開示される中で、死という問題が真正面から取り上げられることになる。死に関しては死者しか詳しいことがわからず、生者が持つ死の知識は似たり寄ったりで、死を想像することしかできない。高校生という多感な時期の歩美は「使者って何なのか」「死者は、生者のために存在してしまっているの

か」「死者に会いたがるのは、すべて生者の勝手な都合なのではないか」と悩む。大人への準備期間であり、子供の頃より身近な人が亡くなるが多くなる高校生だからこそその感情の揺らぎが読者に強く訴えかける。依頼者たちの死者に会いたい理由は様々だが、全員の共通点として「後悔」がある。死者と会った依頼人たちは後悔を晴らせた人物もいれば、会うことで永遠に晴らせなくなった人物もいる。

やり直しの機会を使者から依頼者に与えられている。しかし、現実世界では人は亡くなれば終わり、生者は後悔を背負って生き続けるしかない。後悔のない人生を送りたいと願っても、失って初めて後悔を抱く。『ツナグ』の読者は歩美が悩む姿と自らの経験とを重ね合わせることで、死について考えさせられる。そして、死者に対する後悔やどうにもならない感情に翻弄される登場人物たちに人間らしさを感じる。その疑似体験は後悔のない別れを考えて今を生きる大切さ、難しさを教えてくれる。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 奥野 圭太郎

「これは確かに良い小説だった。」応募者が評された本を实际手に取って読んでみた感想である。今回の書評大賞の審査では、「応募された書評を読んで、ちゃんと読みたくなるかどうか」を最大の評価ポイントとして判断した。学生の皆さんが応募してくれた書評、とりわけ入賞作品については、いずれも力作ぞろいだった印象だったが、優劣をつける手前、この点を軸に評価点を決定した。

さて、本書『ツナグ』と、この書評『後悔の人生』についてである。生きている以上、誰もが一度は「死別した相手と会いたい」という思いを持つ。では死者と会えば後悔が晴れるか、そうとは限らないどころか、死者と生者が出会うことで、死者、生者、そしてその繋ぎ手で客観的な立場の「使者(ツナグ)」にも、三者三様の新たな思いが生まれていく。

この内容を踏まえての、評者の書評の書き出しの「現代人の忙しい日々、大切な人を疎かにしていないだろうか。死は突然訪れる。その時初めて、残された生者は死者への感情を明確に認識する」(要約)という内容は、忙しい日々を送る現代人の誰にも突き刺さる表現であり、思わず引き込まれ、読んでしまう。

書評を評価する立場とは言え、今回は大変良い小説を紹介してもらったような思いである、応募者にお礼を伝えたいぐらいに。

入賞者から一言



この度は佳作に選出して頂き、誠にありがとうございます。本作は私にとって学ぶことが多い作品であり、それを言葉にすることがとても大変でした。そのため、このように評価して頂けたこと、本当に嬉しく思います。最後になりましたが、指導してくださった中西先生、一緒に頑張ってくれたゼミの皆さん、本当に感謝しています。ありがとうございました。

第19回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 1年次生

ま き お は な
榎尾 巴那



書名：『わたしの美しい庭』

著者：風良ゆう

出版社，出版年：ポプラ社，2021

「普通のかたち」

世間には多くの人が考える普通がある。昨今多様性の受容が謳われるようにはなかったものの、いまだに一般的な普通から外れてしまえば「変人」とされてしまう。私たちはその普通の枠から外れることを避け、恐れている。普通から外れる自分を認めたり、普通から外れた人を受け入れる柔軟さを持ったりすることは非常に難しいのだ。

本作は両親を亡くした小学生の百音と血のつながらない統理の二人暮らしを中心に話が進む。普通ではないと周囲に揶揄されようと二人は幸せに過ごしている。そんな二人が暮らすアパートの屋上には縁切りの神様を祀る縁切り神社があり、そこには世間の尺度で測られた普通から外れ、摩耗した心を抱える人々が訪れる。好きな人が忘れられず結婚適齢期を逃した女性、性問題に悩む男性、うつ病で苦しむ男性などそれぞれが世間体や自身と向き合っ折り合いをつけ懸命に生きていく様子が描かれる。

多様性という言葉で枠を作ること生きにくさが助長される世界に生きる多くの人にとって、本作に出てくる著者のあたたかな言葉はきっと心を軽くしてくれる。その1つに「形がないって自由でいいねと言うと、形があっても自由にしていんだよと返される」という言葉がある。私たちは私たちの思い描く普通をものさしにして人を測り、時にそれを他人に押し付けている。しかし、そういった世間の普通の形を形成しなおして自分なりの自由や幸せの形を見つけてもいいのだ。当たり前にも思えるかもしれない考えも、必死に生きているとつい視野が狭くなってこういった思考に至らなくなってしまう。そんな自分に気づかせてくれて、なおかつ優しく勇気を与えてくれる言葉が本作にはあふれている。

本作では登場人物の抱える悩みが完全に解決したり、その悩みを気にしない人間に変わったりするわけではない。それでも彼らは以前より少し自分を愛せるよう

になる。この作品は、お互いの違いを認められないのなら関わらずスルーしてしまってもいいし、普通や幸せに決まった形なんてないのだと登場人物を通して教えてくれる。各個人がそれぞれの心に持つ庭は、考え次第では荒地にもなり得るし、美しくもなる。自分の普通の形を大切に、丁寧に整えることが美しい庭を作り出す秘訣なのだ。

選考委員による講評

選考委員代表 情報理工学部教員 岡田 英彦

書評の定義から考えると、書評が目的としていることは、(1)書籍の内容を未読者に対して正確に伝えること、(2)その書籍の内容について自分の意見を示すこと、である。他者からの依頼により書籍を紹介する目的で書評の執筆を依頼されたケースでは(1)の記載がより重要である。一方、書籍を読んで自ら書評を書きたくなるのは、(2)の意見を他者に対して発信したいという気持ちが強くなった時と思われる。書評大賞への応募は後者であることから、書評を書く人はどうしても(2)の意見を多く記載したくなるはずである。応募された書評のなかには(1)の比重が大きいと感じたものもあり、「読んだ書籍に対して自身の意見を発信したいと強く思ったから応募した」というよりは、「このコンテストに応募したいから本を読んで内容紹介をとにかく書いてみた」と感じたものもあった。後者も本コンテストの目的に合致しており十分に意義のある書評だが、個人的には前者の書評をより高く評価したいと考えた。この書評は(2)を主体として記載されており、執筆者のオリジナルな主張を強く感じる。さらにこの書評は、(2)の記載において(1)をうまく利用しており、自身の考えを示しつつ書籍の内容的なポイントも上手に伝えている。執筆者の自己表現能力の高さがうかがわれる書評である。

入賞者から一言



この度は佳作に選出いただき、誠にありがとうございます。書評を書くことは初めてだったため分からない点多かったですが、大好きな作品の面白さを伝えられていたら嬉しいです。

第19回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

現代社会学部 3年次生

やまざき ようすけ
山崎 遥介



書名：『ジョブ型雇用社会とは何か：
正社員体制の矛盾と転機』

著者：濱口桂一郎

出版社，出版年：岩波書店，2021

「日本の労働システム「メンバーシップ型」の問題点」

あなたは日本の働き方に疑問を持ったことはないだろうか。私は就職活動をする中、学校での学習内容やスキルが反映されにくいことを知り、日本の働き方に疑問や不信感があった。一方近年、メディアでも多く取り上げられ、合理的なイメージのある欧米の働き方に対して漠然と憧れがあった。なので、海外の雇用システムの「ジョブ型」を取り上げた本書を手にとった。

本書は「ジョブ型雇用社会とは何か」というタイトルだが、最大の目的はジョブ型との比較から、日本の雇用システムであるメンバーシップ型の課題や矛盾点を明らかにすることにある。そのために基礎からそれぞれの特徴を分析している。

それぞれの基礎は人と職務のつなげ方にある。メンバーシップ型では職務がその都度柔軟に変更されるため、労働者は長期雇用が前提となる。それ故に使用者と労働者の関係性が重要で、やる気や潜在能力という日本独自の「能力」や信用が重要になる。就職に注目すると、資格などが必要ないため経験の浅い若者には有利に働き、信用がないとされる中高年には不利になる。

対してジョブ型での労働者は、雇用の際に明記された職務のみをこなす。ジョブ型にとつての労働は使用者と労働者の対等な取引であり、労働者自身の「スキル」が重要になる。就職の際には、その証明となる資格を有する中高年の方が有利に働き、経験の浅い若者にとっては不利になる。このように雇用システムそれぞれにメリット・デメリットがあるため、現在よくあるジョブ型とメンバーシップ型の優劣という視点からの議論は見当違いと言えるだろう。

このことを理解せず、安易にジョブ型を目指したことが労働問題の原因の一つである。日本の社会はメンバーシップ型を基盤に様々な制度と深く結びついているため、どちらか片方を改革しても根本的な解決には至らない。だからこそ、なんとなく

ジョブ型を目指した制度は失敗している。評価基準を日本独自の「能力」から、ジョブ型のような「スキル」への移行を目標としたスキル認証制度はその典型と言える。結果として労働問題そのものは改善することなく、むしろジョブ型の制度を導入したことで複雑な問題になってしまった。

私は本書から、労働システムに対する理解が不十分であり、その状態が危険であることを学んだ。実際、私のように漠然とジョブ型をいいものと思っている人も多いのではないだろうか。だがそれは表面的な理解であり、必ずしも正しいとは言えない。そのような誤解は本来の問題点を見失わせ、さらに労働問題を複雑化させる。このことを防ぐところに、本書の基礎に立ち返った分析の意義があるだろう。

このように本書は基礎的な特徴に立ち返ることで、私たちに2つの労働システムの基礎から特徴を知ることができる。よってこれから労働に深くかかわるであろう大学生には、特にお勧めできる一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 武田 史郎

本書評の対象である書籍は、世界各国で広く採用されている「ジョブ型」と、日本独自の「メンバーシップ型」という二つの雇用制度を軸にすえ、これらを比較対照しながら日本の労働問題を論じた内容となっています。

本書評では、誤解や誤用がしばしば散見されるこれら二つの雇用制度の特徴を簡潔かつ的確に要約し、それぞれの制度がもたらす影響や相違点を具体例を交えて平易に整理しています。

さらに、日本のメンバーシップ型雇用制度について、企業の採用・教育・人材配置・評価に関わる制度、大学における教育や就職活動の方法、さらには労働関連法規といった多様な要素が相互に依存し合いながら形成されている複雑な仕組みである点にも言及しています。このような複合的な構造を十分に理解しないまま、制度の一部分のみを変更しようとする安易な改革が失敗を招きやすいという、書籍の主な主張についても書評の中で適切に取り上げられています。

対象書籍は新書であるものの、その内容は極めて高度で専門性を要するものとなっています。しかし、本書評はその要点を的確に整理し、特に大学生にとって本書を読む意義を具体的に提示しており、優れた書評だと思えます。

入賞者から一言



この度は書評大賞に選んでいただき、ありがとうございました。作品の魅力を少しでも伝えたいと試行錯誤してきたので、このような評価をいただけてとても嬉しいです。

また、文章の添削やアドバイスをくださった伊藤理史先生には、心から感謝しています。ありがとうございました。

第 19 回 京都産業大学図書館書評大賞 アンケートと統計

アンケートの回答を一部紹介します。ご協力ありがとうございました！

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- 昨年応募したものの、受賞できず悔しかったのでリベンジのつもりで応募した。
- 自分の表現力を他者に評価されることに興味が湧き、発信してみたいと考えたから。
- 自分が読んだ中で一番好きな本をたくさんの人に読んでもらいたいと思ったから。
- 大学生活の中で好きになった「読書」に関連することをしたいと思ったから。
- 自分の文章能力をもっと身に着けたいと考え、そこで、読んだ本の評価を書き试着みることで、それが培われるのではと考えたから。
- 図書カードが欲しかったから。
- 教員から応募するよう推薦があったから。
- 授業・ゼミ活動の一環として。

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの 1 つ)

- 興味のある分野だから 17 人
- 好きな作家だから 25 人
- 話題の本だから 4 人
- 先生からの推薦・指示 7 人
- 図書館で見つけたから 4 人
- その他 6 人
 - 元々講義で触れたことのある本で、その時に興味を持ったから。
 - 著者のことも本のテーマも知らず、ただ題名に惹かれたから。

Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(60 人)(理由)

- 読書の習慣を続け、文章を少しでもわかりやすく書くことができるようになりたいから。
- 自分の考えた思考を言語化し、それをアウトプットする作業は脳を非常に活性化させるから。
- 毎年応募することで自身の文章が洗練されてきていることが実感できるから。
- 書評を書くことで普段以上に深掘して読むことができ、より内容を理解することができたから。
- 書評を書くことで論理的な思考力が養われ、将来も生きる文章力を身につけることができたから。
- 自分の良いと思った作品を自分の観点を踏まえてほかの人に知ってもらえるというのがうれしいから。

「いいえ。」(21 人)(理由)

- 就活があるから。
- 今年度で卒業する予定だから。
- 本は読んで感想は自分の中にしまっておきたいから。

Q4) 執筆してみたの感想や、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

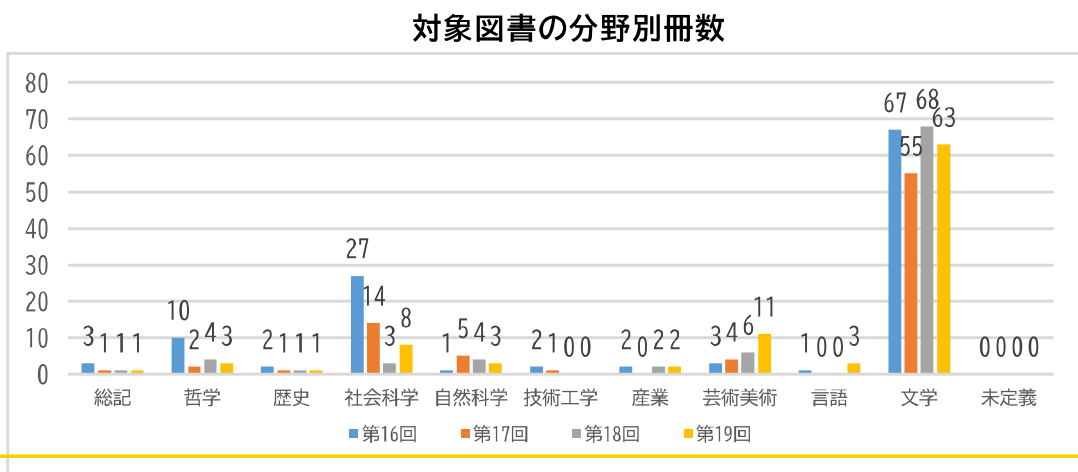
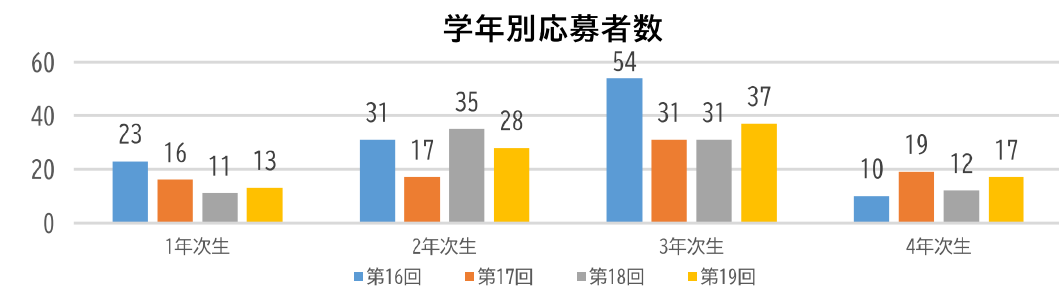
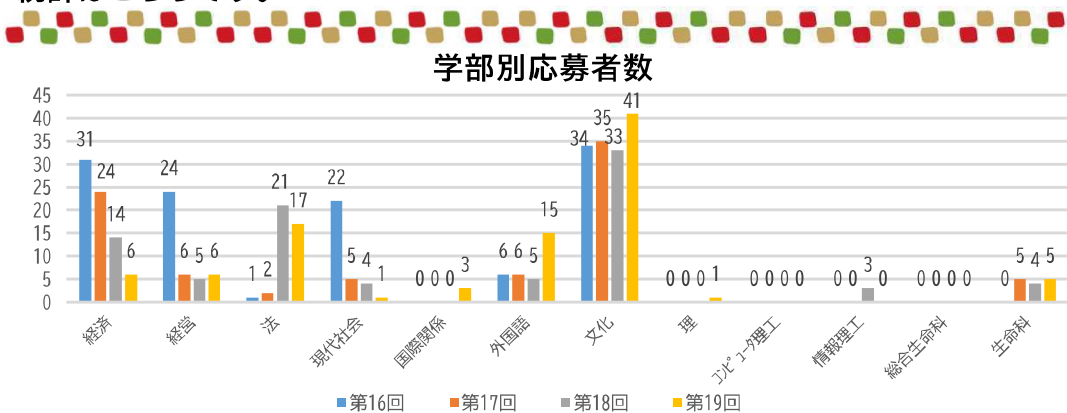
- 書き終わった後の自身の文章の精査が最も重要だと感じた。
- 相手の読みやすさを考えて文章を構成することが難しかった。
- 1200 字と聞いて、初めは分量が多いと思ったが、書いてみると書きたいことがありすぎて、とても収めるのが難しかった。
- 読書感想文との違いに気をつけて書くことが難しく感じた。
- 応募マニュアルがあったので提出方法についての疑問がなかった。
- 上巻・下巻の 2 部作の作品について、提出フォームの資料 ID 記入欄は 1 冊分しかなかったため、これからは 2 冊分を用意して頂けるとありがたい。

Q5) 毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

- 多種多様なジャンルの本を書かれている作家の話をお聞かせください。
- 本屋大賞を受賞された方の講演を聞いてみたい。

- 希望する講演会講師（敬称略・五十音順） -
池上彰・伊坂幸太郎・末近浩太・東野圭吾・湊かなえ

統計はこちらです。



第19回書評大賞には95作品の応募がありました。学部別応募者数は文化学部、法学部、外国語学部の順となりました。学部ごとの応募者数は、文化学部を除いて大幅な増減が発生しています。授業・ゼミ活動で初めて書評大賞を知った皆さんも、これを機にぜひ本を読み、次回もチャレンジしてもらえたらと考えています。

学年別応募者数は、2年次生・3年次生が比較的多い傾向がみられました。文章力の向上には継続的な努力が欠かせません。レポートや論文執筆の訓練にもなりますので、積極的な応募をお待ちしています。

対象図書の分野別冊数では、今回も文学が多数を占める結果となりました。また、例年と比較して美術芸術分野の図書を選択した学生が多いのも特徴的です。一方、社会科学分野の図書は減少傾向にあります。2回目・3回目の応募を検討する際は、これまでとは違う分野の図書を選択してみてはいかがでしょうか。多種多様な図書に触れることで、多角的な視野から物事を考えることができるようになって考えています。

第19回「京都産業大学図書館書評大賞」で応募があった図書一覧

所蔵有無別・請求記号順
書名の【 】内は、応募点数

書名	著者	図書館所蔵情報			
		出版社	出版年	請求記号	資料ID
Factfulness：10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣	ハンス・ロスリング	日経BP社	2019	002.7 ROS	20224632
戦後日本史と現代の課題	天川晃 五十嵐武士	築地書館	1996	210.76 AMA	00815652
#生進子供なし：なぜ日本は世界一、子供を持たない人が多いのか	福山絵里子	日経BP 日本経済新聞出版	2024	334.31 HUK	01397025
デンマーク人はなぜ4時に帰っても成果を出せるのか	針貝有佳	PHP研究所	2023	336.2 HAR	01398132
イスラーム銀行：金融と国際経済	小杉泰 長岡慎介	山川出版社	2010	338.227 KOS	01185517
友だち幻想：人と人の「つながり」を考える	菅野仁	筑摩書房	2008	361.4 KAN	01141724
ジョブ型雇用社会とは何か：正社員体制の矛盾と転機	濱口桂一郎	岩波書店	2021	366.021 HAM	01374421
Z世代化する社会：お客様になっていく若者たち	舟津昌平	東洋経済新報社	2024	367.68 HUN	01397833
母という呪縛 娘という牢獄	齊藤彩	講談社	2022	368.61 SAI	01391542
私たちはどこから来て、どこへ行くのか：科学に「いのち」の根源を問う	森達也	筑摩書房	2015	460.4 MOR	01293853
死にたくないんですけど：iPS細胞は死を克服できるのか	八代嘉美 海猫沢めろん	ソフトバンククリエイティブ	2013	460 YAS	01272037
カメムシの母が子に伝える共生細菌：必須相利共生の多様性と進化	細川貴弘	共立出版	2017	486.5 HOS	01336316
世界で最初に飢えるのは日本：食の安全保障をどう守るか	鈴木宣弘	講談社	2022	611.3 SUZ	01388799
環境対応業：食品卸とサプライチェーンの300年	横田弘毅	食品新聞社	2016	673.5 YOK 1 673.5 YOK 2	01381331 01381332
嫌われた監督：落合博満は中日をどう変えたのか	鈴木忠平	文藝春秋	2021	783.7 SUZ	01375087
なぜ大谷翔平はメジャーを沸かせるのか	ロバート・ホワイティング	NHK出版	2019	783.7 WHI	01350511
勝ち続ける意志力：世界一プロ・ゲーマーの「仕事術」【7】	梅原大吾	小学館	2012	798.5 UME	01343531
『不思議の国のアリス』で英語を学ぶ【3】	Lewis Carroll	国際語学社	2014	837.7 CAR	01274850
空の中	有川浩	角川書店	2008	913.6 ARI	20131293
見知らぬ妻へ	浅田次郎	光文社	1998	913.6 ASA	00869502
十角館の殺人	綾辻行人	講談社	2007	913.6 AYA	20224592
虚ろな十字架	東野圭吾	光文社	2017	913.6 HIG	20171819
人魚の眠る家【2】	東野圭吾	幻冬舎	2018	913.6 HIG	20190514
容疑者Xの献身	東野圭吾	文藝春秋	2008	913.6 HIG	20221991
風立ちぬ	堀辰雄	岩波書店	1981	913.6 HOR	01060827
逆ソクラテス	伊坂幸太郎	集英社	2020	913.6 ISA	01384106
レプリカたちの夜	一條次郎	新潮社	2018	913.6 ITI	20182057
オルタナート	加藤シグアキ	新潮社	2020	913.6 KAT	01371527
余命10年【3】	小坂流加	文芸社	2017	913.6 KOS	20224156
小説 聲の形	倉橋耀子	講談社	2019	913.6 KUR 1 913.6 KUR 2	01389822 01389823

第19回「京都産業大学図書館書評大賞」で応募があった図書一覧

所蔵有無別・請求記号順
書名の【 】内は、応募点数

書名	著者	図書館所蔵情報			
		出版社	出版年	請求記号	資料ID
ミッキーマウスの憂鬱	松岡圭祐	新潮社	2008	913.6 MAT	20221063
三日間の幸福	三秋健	KADOKAWA	2013	913.6 MIA	20190712
風が強く吹いている	三浦しをん	新潮社	2009	913.6 MIU	20221650
成瀬は天下を取りにいく【2】	宮島未奈	新潮社	2023	913.6 MIY	01396848
海辺のカフカ	村上春樹	新潮社	2005	913.6 MUR 1 913.6 MUR 2	20211211 20220500
ノルウェイの森	村上春樹	講談社	1987	913.6 MUR 1 913.6 MUR 2	01391618 01391810
わたしの美しい庭	風良ゆう	ポプラ社	2021	913.6 NAG	20240801
タイタン	野崎まど	講談社	2023	913.6 NOZ	20231187
君は月夜に光り輝く	佐野徹夜	KADOKAWA	2017	913.6 SAN	20210526
そして、バトンは渡された	瀬尾まいこ	文藝春秋	2020	913.6 SEO	20200749
君の辞職をたべたい	住野よる	双葉社	2017	913.6 SUM	20170297
君は永遠にそいつらより若い	津村記久子	筑摩書房	2009	913.6 TUM	20221819
残像に口紅を	筒井康隆	中央公論社	1995	913.6 TUT	20222385
ツナグ	辻村深月	新潮社	2012	913.6 TUZ	20126501
変な絵	雨穴	双葉社	2022	913.6 UKE	01389818
インストール	綿矢りさ	河出書房新社	2001	913.6 WAT	00976659
晩年の子供	山田詠美	講談社	1994	913.6 YAM	20220169
横道世之介	吉田修一	文藝春秋	2012	913.6 YOS	20126110
私とは何か：「個人」から「分人」へ	平野啓一郎	講談社	2012	914.6 HIR	01240720
突然、僕は殺人犯にされた：ネット中傷被害を受けた10年間	スマイリー・キクチ	竹書房	2011	916 SUM	01218905
ロミオとジュリエット	シェイクスピア	新潮社	2010	932.5 SHA	20220429
ハムレット	シェイクスピア	集英社	1998	932.5 SHA	20220195
ハムレット 対訳・注解研究社シェイクスピア選集	シェイクスピア	研究社	2004	932.5 SHA 8	01059388
不思議の国のアリス	ルイス・キャロル	垂紀書房	2015	933.6 CAR	01287236
クリスマス・キャロル	ディケンズ	光文社	2006	933.6 DIC	20212430
小公子	フランシス・ホジソン・バーネット	新潮社	2020	933.7 BUR	20240163
忘れられた巨人	カズオ・イシグロ	早川書房	2017	933.7 ISH	20171946
一九八四年	ジョージ・オーウェル	早川書房	2009	933.7 ORW	20223283
アルプスの少女ハイジ	ヨハンナ・シヨビリ	KADOKAWA	2021	943.6 SPY	20224789

第19回「京都産業大学図書館書評大賞」で応募があった図書一覧

所蔵有無別・請求記号順
書名の【 】内は、応募点数

書名	著者	図書館所蔵情報			
		出版社	出版年	請求記号	資料ID
今日、誰のために生きる?: アフリカの小さな村が教えてくれた幸せがずっと続く30の物語	ひすいこたろう SHOGEN	廣済堂出版	2023	159	(本学所蔵なし)
どうすれば幸せになれるか科学的に考えてみた	石川善樹 吉田尚記	KADOKAWA	2017	159	(本学所蔵なし)
もっと人生は楽しくなる	たぐちひとと	ダイヤモンド社	2021	159	(本学所蔵なし)
思い通りに相手を操る心のガードの外し方: 悪魔的に信頼関係を築くヤバイ話術	Dr.ヒロ	フォレスト出版	2023	361.454	(本学所蔵なし)
赤面: 一生懸命だからこそ恥ずかしかった20代のこと	上田晋也	ポプラ社	2023	779.14	(本学所蔵なし)
夢を叶える「稲妻メンタル」	鈴木千裕	双葉社	2024	788.3	(本学所蔵なし)
幽霊健診日	赤川次郎	文藝春秋	2024	913.6	(本学所蔵なし)
時給三〇〇円の死神	藤まる	双葉社	2017	913.6	(本学所蔵なし)
ロスト・ケア	葉真中順	光文社	2013	913.6	(本学所蔵なし)
本日は、お日柄もよく	原田マハ	徳間書店	2013	913.6	(本学所蔵なし)
小さな恋のうた	平田研也	講談社	2019	913.6	(本学所蔵なし)
今夜、世界からこの恋が消えても	一条岬	KADOKAWA	2020	913.6	(本学所蔵なし)
サイハテ	小林オニキス	PHP研究所	2014	913.6	(本学所蔵なし)
豆の上で眠る	湊かなえ	新潮社	2017	913.6	(本学所蔵なし)
青い孤島	森沢明夫	双葉社	2024	913.6	(本学所蔵なし)
かもめ食堂	群ようこ	幻冬舎	2008	913.6	(本学所蔵なし)
神さまのピオトープ	風良ゆう	講談社	2017	913.6	(本学所蔵なし)
鬼人幻燈抄	中西モトオ	双葉社	2019	913.6	(本学所蔵なし)
村田エフエンディ滞土録	梨木香歩	新潮社	2023	913.6	(本学所蔵なし)
あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。	汐見夏衛	スターツ出版	2016	913.6	(本学所蔵なし)
オートリバー	高崎卓馬	中央公論新社	2022	913.6	(本学所蔵なし)
おやすみ、東京	吉田篤弘	角川春樹事務所	2019	913.6	(本学所蔵なし)
ハリーポッターとアズカバンの囚人	J.K.ローリング	静山社	2001	933.7	(本学所蔵なし)
Alice in Wonderland:The Original 1865 Edition	Lewis Carroll	Independently published	2021	938	(本学所蔵なし)

選考委員よりひとこと

今年も多くの書評に出会えたことを嬉しく思います。これからも大学生のみなさんの熱意と洞察力をもった読書に期待します。今後も多くの人が読書を楽しみ、知識を深めていくことを願っています。(大平)

書評を評価し、書評に対して講評を書く機会はこれまでなく、容易ではありませんでした。複数の委員が所定の観点で評価した結果に基づいて賞が決定されましたが、上位受賞作であっても評価にはばらつきがありました。委員が変われば結果も変わっていたかもしれません。応募者の皆さんにはぜひ次回も応募して頂ければと思います。(岡田)

選考で読みました書評は、いずれも「読みたい」と思わせる「力作揃い」でした。学生の皆さんから面白そうな本を多く教えて貰える良い機会でも有難かったと共に、皆さんが今の時代でも多様な面白い本に触れているのだと再認識する機会でもありました。(奥野)

タイパが当たり前に言われ、ネット上ではリスティング広告に囲まれる中で、読書への誘いや普段の関心と異なる気づきを提供してくれる書評は改めて重要に思いました。皆さんの書評は多くの学生に新たな気づきを届けることでしょう。(川上)

私が大学生だった頃は、移動中や授業の合間などのちょっとした時間に読むため、小説の文庫本をいつも持ち歩いていました。そんな私も、今ではネットを見たり動画を視聴したりすることが増え、本を読む機会がめっきり減ってしまいました。しかし、今回多くの書評を目にして、やはり本を読むのも良いものだへと改めて感じました。(武田)

書評、という硬いことばにひるまず、多くの方が応募されたことが素晴らしいです。書評は感想文ではなく、自分の意見や考え、批評をつうじて客観的視点からみたその本の価値を著す文章。まさに大学での学びの力試しです。みなさんの書評で、一冊一冊の本の価値がぐっと輝いて見えました！(松尾)

多くの応募ありがとうございます。普段から本に親しんでいる方でも書評を書くというのはハードルの高いことだと思います。

これからも多くの方にチャレンジいただき、書くことの楽しさにも親しんでいただければと感じました。(安井)

生成AIが急速に広がる現在にあって、物事を理解し、自らの考えを他者にわかりやすく伝える意義は、より高まっているように感じます。皆さんにとって、本賞がその挑戦への一機会になっていれば幸いです。(森本)

書評大賞の選考に参加させて頂くのも今年で3年目となりました。応募作品を拝読した後、その中で気になった本を読むという流れが自分の中に出てつつあり、皆さんの書評に目を通すことが私自身の読書への動機付けとなっています。(田中)

書評を書く際には色々な力が試されます。著者の意図を正しく理解する能力、文章を適切に要約する能力、自分の考えを他者に共感してもらう表現を考える能力…。社会に出ても必要となるこれらの「力」を向上する機会として積極的に応募してください。(島田)

<第19回 京都産業大学図書館書評大賞 概要>

目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

応募要領(抜粋)

1. 応募資格 京都産業大学の学部学生

2. 応募要件

- (1) 対象とする図書の所蔵は問わない。ただし、マンガ・雑誌・写真集は除く。
- (2) 使用する言語は、日本語とする。
- (3) 文字数:1篇につき 800 字以上1,200字以内。※前回から文字数が変更になりました
原稿は、所定の応募原稿様式*を使用して作成すること。
*応募原稿様式(本学所定のマイクロソフト社 Word ファイル)は、図書館 Web サイト
(<https://www.kyoto-su.ac.jp/library/>)から入手すること。
- (4) 応募作品は本人のオリジナルであり、かつ未発表であること。
(解説等公開済文章の盗用や ChatGPT 等 AI の使用は厳禁です。)
- (5) その他:1人複数篇の応募可。ただし入賞は1人1篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

応募実数

95篇

実施日程

応募期間:2024年5月20日(月) ~ 7月25日(木)

入選発表:2024年11月27日(水)

表彰式:2025年1月15日(水)